

和由千秋

第8回 21世紀の作家—福岡
「^{しょうがい}障碍の美術X—祈り」



2008年 1月5日[土]—3月30日[日]

【開館時間】9:30～17:30(入館は17:00まで) 【休館日】月曜休館(ただし、1月14日(月・祝)、2月11日(月・祝)は開館し、翌1月15日(火)、2月12日(火)が休館。)
福岡市美術館 企画展示室(2F常設展示室内) 【主催】福岡市美術館 【協力】INTIME 福岡(パラマウントベッド株式会社)

【著者作品図説】(上)《ハネが41しー機》2003年 (下)《障碍の花入れ》1999年(花:中村海城)
*上下とも、撮影は吉住美昭、いずれも参考作品であり、本展には出品されません。

福岡市美術館
Fukuoka Art Museum

和田千秋

第8回 21世紀の作家「福岡」
「障害の美術X—祈り」
Ando千秋 The Art of Different Abilities X - Prayer

「21世紀の作家—福岡」は、1999年度より当館において開催されているシリーズ企画展です。ここでは、福岡市を中心とした現代美術シーンで活躍をみせる作家を個展形式で取り上げ、その活動を正當に評価することを目的としています。

シリーズ8回目となる本展では、福岡市在住の美術家である和田千秋が登場します。和田は、1957(昭和32)年大分市生まれ。九州産業大学芸術学部美術科に在学中の1980年、初めての個展を福岡市で開催。以降、福岡市内外で積極的に作品を発表し、有望な若手作家の一人として注目を集めます。この頃の和田は、自身も「美術の内的な必然性によって展開していく作品を作って」と言うように、色とかたちの戯れを重視した抽象的なインスタレーション作品を主に展開していました。

—— 転機が訪れたのは1987年のことです。

この年、和田は長男を授かりますが、間もなくその子には脳に障害があると告げられます。和田は「子どもの障害のことで頭がいっぱい」になり、「以前からの作品を作り続けることに興味を失って」しまいます。作家活動から遠ざかり、長男のリハビリテーションに明け暮れる日々が始まりました。

しかし数年後、和田を再び作品制作へと向かわせたのは、やはりわが子の障害でした。「子どもの障害から学ぶ内に」、「それを美術というかたちで社会に送り返せないだろうかと思うよう」になったのです。そして生まれてきたのが「障害の美術」シリーズなのです。

1992年に始まるこのシリーズにおいて和田は、もはや以前の作風を繰り返さず、絵画をはじめ既製品や文章なども利用した多様な表現形式を同時に展開し、自身の日常にある障害の様々な問題を表現しようとしています。それは、一見美術とは縁遠い要素を取り込むことで、社会と隔絶されがちな現代美術の「リハビリテーション(社会復帰)」の試みでもあります。そして和田の「障害の美術」シリーズは、この試みを本質として保ちながら、今日なお豊かな展開をみせていると言えます。

本展では、シリーズ10回目となる新作が発表されます。「祈り」とのタイトルももつ本作において、和田千秋はどのような新境地をみせてくれるのでしょうか。ご期待下さい。



「障害の美術」について

作品は、多様な解釈を生み出すための装置です。だから、作家が自分の作品を説明することは避けねばなりません。しかしこの「障害の美術」は、少し特殊な作品なので、何故このような作品を作り始めたのかという、経緯を説明したいと思います。

私は、1980年から作品を発表し始めました。80年代は主に、美術の内的な必然性によって展開していく作品を作っていました。しかし87年に、長子が生まれる時に障害を負って、全く作品を作れなくなりました。子どものリハビリテーションに時間をとられるのと、以前からの作品を作り続けることに、興味を失ったからです。子どもの障害のことで頭がいっぱいでした。障害をもつ子どもの親は、親自身もある意味で障害を負ってしまいます。私も作品を作る自信を失っていました。

それから数年間、子どもから教えられたり、励まされたりする中で、私は子どもとともに育ちました。育児は育自といひます。子どもの障害から学ぶ内に、私は次第に、障害のさまざまな問題を美術家として受け止め、それを美術というかたちで社会に送り返せないだろうかと思うようになりました。そこで、私自身が立ち直るためのリハビリテーションも兼ねて、作品の制作を再開しました。

したがって「障害の美術」は、「障害のさまざまな問題を扱う美術」というほどの意味で、私自身の障害の受容と治癒を契機として生まれました。しかしそれは一方、社会と切り離されて自律運動してきた現代美術に、他の領域から、いわば他者性を取り込むことなのです。その意味で「障害の美術」は、美術のリハビリテーション(社会復帰)とも言えるでしょう。

—— 和田千秋、1992年



- 【参考作品図録】
- 1 「母親こそ最良の教師」1994年 撮影:吉住美昭
 - 2 「障害の美術I」(展示風景)1992年 天画廊(福岡市) 撮影:吉住美昭
 - 3 「日本の夜明け」1992年 撮影:吉住美昭
 - 4 「障害の美術V—受容」(展示風景)1996年 Gallery Q(東京都) 撮影:上田雄三
 - 5 (上)〈すべて人は障害者である〉1997年、(下)〈訓練室(子よ立ちて歩め マタ9.5)〉1996年 撮影:黒川未来夫
- ※いずれも参考作品であり、本展には出品されません。

【関連イベント】和田千秋 アーティスト・トーク

2008年2月9日(土) 14時~
福岡市美術館1F 教養講座室にて
*事前申込は不要です。

【観覧料】常設展示観覧料でご覧になれます。

一般200(150)円 高大生150(100)円
小学生、聴覚手帳、身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳、福岡市発行のシルバー手帳所持者は無料。()内は20人以上の団体料金。



福岡市美術館
Fukuoka Art Museum

〒810-0051 福岡市中央区大濠公園1-6

1-6, Ohori-koen, Chuo-ku, Fukuoka-shi, 810-0051, Japan

Tel : 092-714-6051 <http://www.fukuoka-art-museum.jp/>

*和田は否定的な意味合いの強い「障害」に換えて、「障」や「障」の文字をすべての作品に用います。これに倣い、本展でも原則的に「障」と表記いたします。
*上段解説文中、作品シリーズ名・作品タイトル以外の「」内は、すべて下段の和田千秋によるテキスト作品からの引用です。